〈研究ノート〉

日本人学生のための日本語教育（2）
── 専門分野を生かした，学習意欲を高める教材 ──

境　　希里子*

Japanese Language Education for Japanese Students (Part2):
Teaching Materials for Motivating Students

Kiriko Sakai

要　　旨　大学で，日本人学生のための日本語の授業を必修科目として行うことは，今や当然のこととなってきた。しかし，必修科目にするには，問題点もある。本稿では，問題点の中から，クラス編成，受講者の学習意欲，外国人留学生の存在について考えた。一番大切なことは，受講者全員に学習意欲があることだ。選択科目と違い，必修科目には，日本語力をつけたいと望んでいる学生と必修だから仕方なく取っている学生がいる。前者には学習意欲を維持させるために，また，後者には学習意欲を出させるために，授業内容を工夫しなくてはいけない。その一案として，学生の専門分野を生かした教材を用いて，わかりやすく書くことの大切さを視覚的に確認させる授業の紹介をする。好きな専門分野と関連させて日本語の授業の意図が理解できる。日本語は，大学でレポートや卒業論文を書いたりするためだけに必要なのではない。あらゆる学びの基礎であり，社会や企業で求められる様々な能力の重要な要素の一つでもある。大学は，日本語を授業として学ぶ最後の場となる。学生は，それを自覚して，日本語力を高めていってほしい。

キーワード　日本人学生　　日本語教育　　学習意欲

1. はじめに

日本経済団体連合会は毎年，同会企業会員に新卒採用に関するアンケートを行っている。2012年4月入社を対象とした調査結果では，採用選考時に重視した点の第一位は9年連続で「コミュニケーション能力」（82.6%）であった。第二位の「主体性」（60.3%），第三位の「チャレンジ精神」（54.5%）を大きく引き離している。

小野他（2012：96–97）は，現在，多くの大学で「教員や仲間とのコミュニケーションが取れない学生の存在が問題となっている」ことに注目し，コミュニケーション能力の測定と育成方策を研究している。「学生が新しい環境の中で友人を作り，大学生としての新しい生活に馴染むこと，教員を含む指導者たちの意図を理解しその期待に応えようとすること，そして自分が感じていることや考えを他者に伝えられることが充実した学生生活に役立つと考えて」おり，その実現のためにコミュニケーション能力は欠かせないとしている。また，企業が採用選考時に最も重視する点であるということは，学生の将来にも大きく関わってくる。

コミュニケーション能力を身につけるための要素は多岐にわたる。日本語力も大切な要素の一

*本学准教授　日本語教育

つである。日本の大学で学ぶための手段・道具は日本語である。日本人学生の日本語力の低下を危惧し，わかりやすく書くことや話すことを学ぶ「日本人学生のための日本語教育」を行う大学が増えている。必修科目とする大学も多い。日本語力を高めることはコミュニケーション能力を高めることにもつながる。それは，充実した大学生活を送る，卒業後は希望している道に進む可能性が広がることも意味する。日本語の授業は，単にレポートや卒業論文を書いたりプレゼンテーションをしたりするために必要な日本語力を身につけるだけではない。大きな役割を担っている。

本稿では，まず，日本語の授業を必修科目にした場合の問題点について考える。次に，その中の一つである，学習意欲を高めるための一案として，学生の専門分野を生かした教材を用いた授業の紹介をする。

2.「日本人学生のための日本語教育」を必修科目として行う場合の問題点

「日本人学生のための日本語教育」の必要性が認識されるとともに，必修科目として開講されることが多くなってきた。本学でも，2013年度から必修科目が始まる。新都心キャンパスの短期大学部服装学科・キャリア形成教育科目「文章表現演習」（1年次・前期）と，小平キャンパスの現代文化学部・学部共通基礎教養科目「日本語文章作成演習Ⅰ」（1年次・前期），「日本語文章作成演習Ⅱ」（1年次・後期）である。少人数制で，専任教員が受け持つ。

選択科目としては，新都心キャンパスには，服装学部と造形学部，短期大学部に総合教養科目「文章作法」，総合教養科目・夏期集中授業「役に立つ文章テクニック」（2010年度で終了），コラボレーション科目「文章作法　基礎の基礎」があることを境（2012）で紹介した。短期大学部の総合教養科目「文章作法」は，必修科目が始まるので，2012年度で終了する。また，2013年度からは服装学部服装社会学科・専門教育科目「基本文章表現」（2年次・通年・選択科目，外国人留学生は言語運用能力向上のために必ず履修）も開講される。

必修科目として開講されるのは望ましいが，必修ゆえの問題点もある。クラス編成，受講者の学習意欲，外国人留学生の存在などである。

■クラス編成

日本語の授業は少人数で行ったほうが学習効果が上がる。クラス分けをしなくてはいけない。学籍番号順に分ける，日本語力で分ける等がある。学籍番号順の場合は，新学期の慌ただしいときにクラス編成を考える教員側の労力は少なくて済む。しかし，日本語力には違いがある。様々なレベルの学生を一クラスで教える苦労が待っている。日本語力で分ける場合は，日本語の試験を行わなくてはいけない。どのような試験を用いるか，総合点で判断するか，読解力や語彙力で判断するか等，クラス分けをするまでにかなりの時間を使うが，授業はしやすくなる。ただし，外国語ならともかく，母語である日本語をレベル別のクラスで受けることに抵抗を感じる日本人学生もいる。日本語力でクラス分けをしている大学を2校，紹介する。

京都精華大学人文学部1年生は，「日本語リテラシー」という科目を全員，取らなくてはいけない。AO入試のデータや一般入試の国語の成績によってレベル分けをする。2007年度は，入学

生約450名を5クラスにレベル分けしている。上位と下位の1クラスずつは人数を少なくし，その間の3クラスは約100名ずつである。100名という数字は一見，多そうだが，教員1名とチューター2名のチームティーチングで授業を行っている。チューターは，助手（教員）である。レクチャー（講義に相当）は100名全員で受講するが，ワークショップ（実習に相当）は約30名ずつに分かれて受講する。石川・田中（2008：64–65）は，「教員もチューターも，それぞれワークショップにおいて10名程度の学生を担当し」，「一度に全員と話をするのではなく，一人ひとりに声をかけていく。個々の学生の感覚や思考を引き出すためには1対1の密な対話が必要だと考えているからである」と述べている。筆者が担当している，3日間の集中授業である「文章作法　基礎の基礎」も，学生一人ひとりとじっくり話し合いながら文章を完成させることに重点を置いているため，受講者数を10名までとしている。きめ細かな指導をするには，教員一人が受け持つ学生は10名程度が適切であることを，筆者も経験から納得できる。京都精華大学のように，レクチャーとワークショップで受講人数を変えるのも一案である。この受講方法は，学籍番号順に分ける場合にも適用できる。

大阪体育大学体育学部には，1年次の前期に必修科目「日本語技法」がある。工藤他（2011：125）によると，「4月の入学式直後に実施するクラス分け試験の結果にもとづく30名程度以下の習熟度別クラス編成」を行っており，クラス分け試験の点数が悪く，リメディアル教育の対象となった学生は，前期に「日本語技法演習（基礎）」を受講してから後期に「日本語技法」を受講することになるそうである。大阪体育大学体育学部は，「日本語技法」のほかに，「自然科学基礎」「英語Ⅰ」でもクラス分け試験をしている。熱心な指導は，必ず学生のやる気に働き掛け，良い結果を生む。

■受講者の学習意欲

選択科目であれば，自分の日本語力を高めたいという気持ちがあるからこそ受講するのであり，少なくとも授業開始時の学習意欲は高い。実際に文・文章を書いていくうちに，自分が思い描いていたほどの進歩がなかったり，他の学生と比べて悩んだりすることはある。そのときに，学生の学習意欲が維持できるように，授業担当者は助言をしたり授業内容を工夫したりする必要がある。

必修科目の場合は，学生の希望とは関係なく，全員が受講することになる。レポートの書き方やプレゼンテーションのしかたを学ぼうという気持ちはあっても，その基礎となる，わかりやすい文・文章の書き方等の授業には興味を示さない学生もいる。どうして大学に入ってからも日本語の授業を受けなくてはいけないかが納得できないと，学習意欲はわかない。学習意欲がわかなければ，授業内容に興味を持てず，結果として身につかない。学習意欲がある学生にも悪影響を及ぼす。授業担当者は，学習意欲がない学生がクラスに一人でもいると，対応に時間を費やされる。

自分の日本語力に自己満足していて，日本語の授業を受ける必要性を見いだせない学生もいる。だが，自己満足は自己満足でしかない。また，大学で学ぶのに必要な日本語力が不足しているの

にそれを自覚できない，もしくは認めたくない学生もいる。これらの学生は，日本語の授業に限らず，伸びる力を自分で止めてしまっている。

大学ではスキルを教えることに重点が置かれがちだが，高等学校までに力がつかなかった原因の一つとして考えられる学習意欲や学習習慣の改善も大学ですべきだという指摘もある（朝比奈，2012）。改善するためには，授業担当者も学生も忍耐を要する。けれども，そこから始めなくてはいけない学生もいる。

日本語力が十分で，かつ自分の日本語力を謙虚に受けとめる学生は，学籍番号順にクラスを分けたので他の学生と日本語力の差がありすぎても，自分で目標を定め，力を伸ばしていける。学習習慣が確立しており，自分の置かれた場で学習意欲を維持することができるからである。

大和久（2011：151–152）は，「音楽専攻の学生が音楽の技術を習得してきた過程を英語学習に応用することは可能」かについて調査をし，英語が苦手な学生には「聴覚が優れていることから音楽を使ったインプットや会話の暗唱，反復練習に慣れていることからパターンプラクティス，パフォーマーとして自己表現の場を増やす」などを提案している。しかし，英語のプレースメントテストの上位者は，指摘されるまでもなく，自ら，音楽の技術を習得してきた過程を英語の習得に生かしていたという。

学習意欲を持ち，学習習慣が確立している学生は，自ら学習方法を編み出すこと，経験を生かすことができる。このような学生に育てるのも大学の役目の一つだろう。「クラス編成」で，学籍番号順に分けると，様々なレベルの学生を一クラスで教えることになるので苦労すると述べた。だが，クラスの学生全員が一定以上の学習意欲を持っていれば，クラス内で日本語力の差はあっても充実した授業になる。やる気があるかどうかが大切である。

学習意欲に関する，筆者が試みた教材については「3. 専門分野を生かした，学習意欲を高める教材」で紹介する。

■外国人留学生

新都心キャンパスで開講されている「文章作法」等の科目は，外国人留学生も受講することができる。しかし，選択科目なので，境（2012）でも述べたように，外国人留学生の受講者はいないか，多いときでも受講者全体の1割程度であるため，「日本人学生のための日本語教育」として紹介した。必修科目として日本語の授業を開講した場合は，当然，外国人留学生にとっても必修科目となり，日本語が母語である学生（日本人学生）と日本語が外国語である学生（外国人留学生）が同じクラスで授業を受けることになる。「日本人学生のための」とは言い難い。

クラス編成で紹介した京都精華大学人文学部は，約450名の1年生を，日本語力で5クラスにレベル分けしている。上位クラスと下位クラスが1クラスずつで，その間のクラスが3クラスある。3クラスのうちの一つに，外国人留学生10名全員が所属している。

本学は，外国人留学生が多い。日本語力も，個人差が大きい。日本語力でクラス分けをしたら，中間から下のクラスに外国人留学生が多数，所属する可能性が高い。上位クラスにも外国人留学生がいるだろうが，クラス分けの試験の結果が良いからといって，日本語を母語とする日本人学

生と同じ授業内容，授業方法で成果が上がるかは疑問である。これは，どのレベルのクラスにも言える。学籍番号順にクラス分けをした場合も同じだ。試験ではかることができる日本語の文法や表現だけでは済まない問題があるからだ。

日本語の言葉や表現がもつ文化的背景や意味を理解しているか。日本の文化や行事，社会事情がどこまでわかっているか。例えば，「お正月」「部活動」という言葉を見たり聞いたりしたときに，日本人学生と同じことが頭に浮かぶだろうか。単語から広がっていく世界を想像できるだろうか。言葉の意味は，辞書に載っている説明だけではわからないものもある。自分の経験が生きてくる。日本人学生は当然わかっていることでも，外国人留学生には意味の確認や説明をしなくてはいけないことも多々ある。もちろん，日本人学生にも説明をしなくてはいけない言葉や社会事情もある。だが，外国人留学生には，そのときも，より詳しい説明が必要だ。

日本語の授業で読解や要約ができない，与えられた題にあった作文が書けない等の一因は，日本に対する知識や日本での経験の不足にある。これは，日本語の授業に限定されたことではない。しかし，日本語の授業であるならば，より細かな対応が求められる。ただ，同じクラスに日本人学生もいる。外国人留学生の対応に時間を取られて，その間，日本人学生を待たせてしまうと，日本人学生の学習意欲をそぎ，伸びる力を伸ばすことができなくなる。

では，外国人留学生だけのクラスを作るのか。作るにしても，日本語力の差が大きいと，一クラスというわけにはいかない。外国人留学生の中でのレベル分けが必要だ。また，本学は外国人留学生対象の外国語科目「日本語」（選択科目）もあるので，どのように補完しあっていくかも課題になる。

日本人学生にとっても，外国人留学生にとっても，日本語力を伸ばす授業となるように，教材の選び方や授業の組み立て方を熟考しなくてはいけない。細部にわたる検討を要する。

3. 専門分野を生かした，学習意欲を高める教材

筆者が受け持っている「文章作法」「文章作法　基礎の基礎」は選択科目である。日本語の力をつけたいと希望して授業に出席している学生なので，授業開始時から学習意欲がある。常に「やる気」を感じる。予習や課題も指示通りにこなし，学習習慣も確立している。授業担当者としては，恵まれた状況で授業をすることができる。筆者が気をつけていることは，学生のやる気を維持すること，できれば高めることである。

学習意欲を高めるためには，到達目標を言葉だけではなくわかりやすい形で示したり体験させたりする，または学生が興味のあること，例えば専門分野と関連していることを教材に用いたりすると効果がある。服装学部の新入生が，入学直後の4月に，4年生が行うファッションショーを見るのは，到達目標をわかりやすい形で示す一例である。視覚的に確認できるので，印象に残る。造形学部の学生が卒業制作展を見ることも同じ効果がある。

筆者は以前，文化外国語専門学校日本語科で，日本の大学や専門学校に進学することを希望している外国人留学生に日本語を教えていた。入学試験に合格し，4月からの進学先が決まると，授業を受ける態度に緊張感がなくなる。昨今の，AOや推薦の入学試験で早々に合格した日本人

学生と同じである。そこで，文化学園大学（当時は文化女子大学）の教授に，大学の教室で，外国人と意識せずに講義をしてもらった。外国人留学生は，このとき初めて日本の大学の講義を聴く。合格したと喜んでいたものの，自分の日本語力では入学後の授業に不安があることに気がつく。筆者たちが，合格したからといって気を抜いてはいけないと何回言うよりも，実際の講義を一回聴くほうが効果がある。その後の日本語科の，大学入学後に必要とされる講義を聴いてノートをとったりレポートを書いたりする学習の動機づけになった。これも，到達目標を体験させる例である。

文化服装学院に進学が決まった外国人留学生には，実際の授業を見学させてもらった。その後，ファッション関係に進学する外国人留学生に対しても，講義を聴いてノートをとったりレポートを書いたりする学習を行った。教材の内容は，ファッションに関係したものにした。専門分野に関係する教材を用いて学習意欲を高める例である。

ファッション教材の中に，ある服装について書かれた文章を読み，それを絵で表現するというものがあった。語彙と物が一致しているかを確かめるための教材である。ファッション画の練習ではない。文章は，筆者たちが，ファッション雑誌に載っている写真を見て作成した。絵が完成したら集めて，「（文章にはプリーツスカートと書いてあるのに）これはギャザースカートです」などのコメントを書いて返却した。返却時に，雑誌の写真も見せた。本学の夏期集中授業で，これを思い出す出来事があった。

■自分の服装を，文章で表現する

本学では，2010年度まで，北海道で夏期集中授業を行っていた。短期集中で，総合教養科目の単位取得を目指す。全学部・全学年の学生が受講できる。筆者は，野原明名誉教授の「役に立つ文章テクニック」の添削補助員として毎年，参加していた。

1998年度から2005年度まで，矢島功教授の「役に立つファッションメッセージ」（2005年度のみ「役に立つデザインメッセージ」）が開講された。受講者は100名を超え，夏期集中授業の会場であるホテルの大広間で行われていた。あるとき，にぎやかな声がしているので覗いてみたら，学生が，紙を片手に大広間を走り回っていた。自分の服装を文章で表し，他の学生にそのイラストを描いてもらうという授業の，最後の段階だった。

この授業の手順は次のとおりである。①学生に一人一枚ずつB4の白紙を配る→②学生は，白紙の左半分に，髪形から靴まで，今の自分の服装を文章で説明する。自分の名前は書かない→③授業担当者は，記入済みの用紙を集める→④授業担当者は，文章を書いた学生となるべく離れた席の学生に，記入済みの用紙を一人一枚ずつ渡す→⑤用紙を受け取った学生は，用紙の左半分に書かれた文章を読み，それをもとに用紙の右半分にイラストを描く。イラストを描き上げる時間は，△時までと決まっている→⑥△時になったら，100名以上の学生が一斉に席を立ち，描き上げたイラストと同じ服装の人を探して用紙を返す。

学生が走り回っていたのは，イラストと同じ服装の人を探すためだった。人数も多い，同じような服装の人も多いという中であっても，すぐにイラストと同じ服装の人を見つけることもでき

る。上着の色や柄，袖の長さ等，一つ一つが詳しくわかりやすい文章で書いてあったので，正確なイラストが描けたためだ。イラストの相手を見つけて用紙を渡し，自分も用紙を返してもらったら席に着くことになっていた。見ていると，4〜5名の学生が，最後まで相手を見つけ出せずに困っていた。情報不足でイラストをきちんと描くことができなかったのだ。

筆者は，これを服装学部の「文章作法」で行った。初回と2回目の授業で，わかりやすい文・文章を書くにはどのようなことに気をつければいいかを説明する。練習問題もする。この段階では，学生は受け身になりやすい。初回の授業開始時のやる気も，少し陰りを見せる。頭の中では，わかりやすい文・文章を書かなくてはいけないと理解できるが，果たして書けるのか。書けなかったとき，自分にどのような不利益が生じるのか。不安を抱えたまま作文を書き始めると，それが文章にも出てしまう。この時点で学習意欲が下がっては困る。そこで，文字だけの作文を書く前に，わかりやすい文・文章について視覚的に確認することにした。

ただし，「文章作法」は30名と人数制限をしているため，矢島教授とすべて同じ方法で授業を進めることはできない。教室で，その日の服装について文章を書かせても，その文章を読む学生が，文章ではわかりにくいことや不足していることを自分の目で見て補ってしまう恐れがある。少人数なので，この文章はあの学生だと見当がつく。また，描いたイラストをもとに本人を探すのも少人数では面白くない。そこで，ドレスコードの催しを利用することにした。

ドレスコードの催しは，2011年度から行われている。2012年度のフライヤーには「……ドレスコードとは，社会におけるさまざまな場所や機会，またパーティなどの場面での服装規定をさします。BUNKAではその服装規定に色を設定し，これに基づき，思い思いのファッションを身にまとって登校し，授業終了後は学生企画のさまざまなイベントを行います」とある。文化服装学院，文化ファッション大学院大学，文化外国語専門学校と合同の行事だ。2012年度の色は，「青（澄み渡った空のように，未来に広がる先進の色）と黄（幸福を呼び，心を軽く浮き立たせてくれる色）」だった。2011年度は，ピンクとライトグリーンだった。

ドレスコードの日の自分の髪形から靴までを文章で表すことを，自宅での課題とした。もし，ドレスコードの催しに参加できなかった場合は，ドレスコードにこだわらずに，その日の服装を表せばよいことにした。B4の白紙を事前に渡して，そこに自由に書かせた。縦書きでも横書きでも，長い文章でも箇条書きでもいい。髪形から靴までひとまとまりの文章にしてもいいし，それぞれの部分に分けて，項目を立てて書いてもいい。どうすれば読み手が読みやすいかを考えるように指示した。自分の名前は，用紙の裏に書く。そして，書いてきた文章を次回の授業のときにクラス内で交換すること，もう一枚B4の白紙を渡すので，ほかの学生の文章を読んでイラストを描くこと，イラストを描くための色鉛筆を持って来ることを説明した。

イラストを描く回の授業では，ドレスコードの日に一緒に行動をしていない学生，その日の服装を知らない学生に，課題の文章がわたるようにした。もらった文章だけを頼りにイラストを描く。裏に書いてある名前を見てはいけない。髪形などから，文章を書いた学生はあの席の学生だと推測できても，文章でわからないことを口頭で質問するのも禁止である。描きながらわからないことがあったら，イラストにその旨を書き添える。イラストを描く時間は△時までと決めてあ

る。それまでに描き終わるようにする。時間になったら，裏の名前を見て，本人に返す。返してもらった学生は，イラストを見て，自分の言いたいことが伝わっているかどうかについて，イラストが描いてある紙に感想を書く。自分の文章に対する内省である。

学生A・Bの，自分の服装を表した文章と，イラストを見ての感想を紹介する（資料参照）。イラストを描いた学生が，イラストに書き添えていたことも記した。表記，改行のしかた等，すべて原文のままである。インターネットのサイト名などは伏せ字にした。Aは，文を連ねて一気に書いている例である。Bは，それぞれの部分に分けて説明している例である。

ここで紹介した学生に限らず，ほとんどの学生が詳しく書いていた。中には，詳しく書こうとするあまり文章が長くなりすぎ，イラストを描く学生は読みこなすのに苦労していた。詳しく書けばわかるというものではない。Aの文章も，最初の1文や購入場所，「お気に入りです」「いつもと同じ」という，イラストを描くのに必要のない言葉を削ることもできる。反対に，文章が簡単すぎる学生もいた。手抜きではない。自分ではこの文章でイラストが描けると思っていたようだ。イラストは描いてもらったものの，袖の長さがわからない，スカートの色がわからない等の添え書きが多かった。文章が簡単すぎた学生は，「言葉で説明するのはむずかしいと改めて思いました」と反省していた。

Bの文は，言葉の途中で改行しているところがある。その個所は読みにくい。髪形の説明に，「前髪は右側に流し」とある。学生の文章を読んでいると，髪形や服の飾りなどで，右・左という言葉がよく出てくる。ある学生は,「写真で見たときの右側」と表現していた。この表現だと，イラストが描きやすい。

A・Bを含めたそれぞれの学生は，自分の文章をもとにしたイラストを見ての感想に，「微妙な形やサイズや色を説明する単語がみつからなかった」と反省しながらも，「説明するときは自分が相手側の立場になるとより正確になるとわかりました」と得ることもあり，「伝わることの嬉しさを実感できた」と書いていた。また，「（イラストを描くためにほかの学生の文章を読んでいて）『ここの説明, もっと書いて欲しかったな』と思うところや,『ここの説明は分かりやすい！』と思うところなど，色々発見がありました」という感想もあった。

半期の授業がすべて終了した時点で，毎学期，授業全体についての感想・意見を書いてもらっている。「自分の服装を，文章で表現する」については，この活動を行った学生全員が，読み手を意識し，伝わることの大切さを実感できた授業だったので，ドレスコードに限らず，機会を見つけて続けてほしいと書いていた。「学部の特色を生かしている」「（伝わったので）自分の文章力に少し自信を持つことができた」という感想もあった。また，「文章の表現だけでなく，字の書き方からも，その人の人柄が表われ(ママ)ている感じがしました」との鋭い指摘もあった。

自分が想像していたイラストと実際のイラストで違う個所があった場合，言いたいことが伝わらなかったことを視覚的に確認できる。視覚化されると問題点を自分で見つけやすい。専門分野と関連したことなので，どうして伝わらなかったか，どの言葉や表現をどのように変えればいいかを自分で工夫したくなる。自分で気づき，自分で改善していこうとすることが，学習意欲の維持・高まりにつながる。学生は，わかりやすく書くことは大切だということを視覚的に確認し，

伝わることの大切さ，伝わったときの喜びを実感できた。専門分野を生かした教材で学習意欲を維持させるという目的は達成した。

わかりやすい文・文章の書き方の解説をするときに，読み手がどのような人であるかを考えるようにと注意している。年齢，専門分野，文化的背景などである。今回は同じ専門分野を学んでいる読み手であったため，普段から使っている言葉をそのまま用いることができた。専門用語も使えた。この教材は，読み手に合わせて言葉遣い等を変える練習にも使える。他学部の学生に説明するときにも同じ文章でいいのか。子供が読み手のときはどうするか。専門用語が使えないときはどうするか。自分が今，学んでいる専門分野のことであり，好きなことでもあるので，どのようにすれば伝わるか試行錯誤することは苦ではない。伝えたいという気持ちがあれば，自分で考える。

■ポップ広告を作る

書店で，店員手作りのポップ広告を見かける。ポップ作りのカリスマ店員もいる。それまで何年も売れなかった本が，店員手作りのポップ広告のおかげで爆発的に売れ，映画化されたこともある。出版社が販売促進のために作ったものではないので，同じ本でも書店によって異なる。ポップ広告は，文章だけでなく，絵など視覚的な要素も盛り込まれている。まず視覚的な要素で客の関心を引き，文章を読んでもらう。絵や文字の大きさ，全体の配置なども重要である。ポップ広告を作ることは，服装学部だけでなく，美術やインテリア，建築に関することを学ぶ造形学部の日本語の授業においても，専門分野を生かした教材として用いることができる。

服装学部の「文章作法」では，境（2012）で紹介したように，2011年度に初めて行った。作成の条件は，出来上がり寸法はA4の大きさにするということだけだった。作文や，前述の「自分の服装を，文章で表現する」は手書きだが，ポップ広告だけはコンピュータのソフトウエアを使ってもよいことにした。題材も，小説，漫画，映画など自由にした。大半の学生は手書きの文章に絵を描いたり写真を貼ったりして，色彩も豊かなポップ広告を仕上げていた。完成したポップ広告は，授業時に全員で鑑賞した。最後に，客の立場として見たときに，その小説などを手に取ってみたくなるかを基準に投票をして，1〜3位を決めた。

専門分野の知識や技術を生かしながら，そこに文章も加える。敬遠しがちな「書く」ことも，好きなことと一緒だと書こうという気持ちになる。自信があることと一緒だと，その自信が文章にも表れる。文章だけになったときにも，書こう，書けるという意欲は維持できる。

4. おわりに

大学で，日本人学生のための日本語の授業を必修科目として行うことは，今や当然のこととなってきた。しかし，必修科目にするには，問題点もある。問題点は大学によっても開講年度によっても異なる。詳細な検討をしたうえで始めなくては，学生も授業担当者も，ひいては大学自体も混乱に陥る。本稿では，クラス編成，受講者の学習意欲，外国人留学生の存在について考えた。一番大切なことは，受講者全員に学習意欲があることだ。

必修科目であるので仕方なく勉強させられているという気持ちの学生は，わかりやすく書くための解説を聞いたり，自分が書いた作文のあちらにもこちらにも赤字が入っているのを見たりすると，授業に出るのが嫌になる。学習意欲があった学生でも，維持するのが難しくなる。では，そのようなときに授業担当者は何ができるか。一案として，筆者は，学生の専門分野を生かした教材を用いて，わかりやすく書くことの大切さを視覚的に確認させた。好きなことを通して授業の意図が理解できれば，その後の学習意欲を維持できる。

本学の学生は，本学の授業内容は初年次から専門性が高いということを意識している。また，それを望んで入学している。「文章作法」を受講していた，ある学生は，半期の授業終了時の感想に「特に，私たち文化学園の学生は，着ている服で自分を出していますが，文章にも同じ力がある気がします」と書いていた。表現する方法は多々ある。服を作る，服装のコーディネートを考える，絵を描くなど，自分が好きな専門分野で学ぶ表現もあれば，文章という表現もある。どちらかだけでも，表現としての力はある。しかし，組み合わせることによって，相乗効果も生まれる。いくつもの表現方法を身につけていることは強みとなる。

藤原（2003）は，「国語はすべての知的活動の基礎である」「国語は論理的思考を育てる」「国語は情緒を培う」「祖国とは国語である」と言っている。そのために，小学校では国語に多くの時間を割くべきだと主張している。すでに大学生になってはいても，藤原の言う日本語の大切さに気づき，日本語力を高めたいという意欲があれば，学ぶのに遅くはない。社会や企業も，大学の取り組みに期待している。日本語の力がつくということは，単に科目としての「日本語」の評価が良くなるだけではない。日本語は，大学全般の学びの基礎である。教養を身につける，専門分野を学ぶ等，あらゆることに関わってくる。「はじめに」で，企業が採用選考時に，コミュニケーション能力を最も求めていることを述べた。コミュニケーション能力は，大学や社会でも欠かせない。この能力も，日本語の力なくしては成り立たない。日本語は，生きていくすべての礎である。大学は，日本語を授業として学ぶ最後の場となる。学生は，それを自覚して，日本語力を高めていってほしい。

参考文献

朝比奈なを（2012）「リメディアル教育の有効性を向上させるために―大学は高校を理解しているか―」『日本リメディアル教育学会関東甲信第1回研究大会予稿集』p. 27

石川伸晃･田中岳（2008）「学生の「考える」力を育成する教育実践と組織基盤（京都精華大学「日本語リテラシー」を事例として）」『リメディアル教育研究』第3巻第1号2008　日本リメディアル教育学会　pp. 63–70

大和久吏恵（2011）「音楽と英語学習における学びの応用」『日本リメディアル教育学会第7回全国大会発表予稿集』pp. 151–152

小川京子・安藤葉子・境希里子・岡部都（1991）「ファッション関係の専門学校に進学を希望する外国人に対する日本語教育」『文化外国語専門学校日本語課程紀要』第5号　pp. 110–171

小川京子・安藤葉子・境希里子・岡部都・島根郁子（1992）「日本語科進学コース学習目的別選択授業報告」『文化外国語専門学校日本語課程紀要』第6号　pp. 6–74

小野博・工藤俊郎・穂屋下茂・田中周一・加藤良徳・長尾佳代子（2012）「学習型コミュニケーション能力の測定と育成方策（学習型コミュニケーション能力を高める授業の導入を目指して）」『リメディアル教育研究』第7巻第1号2012　日本リメディアル教育学会　pp. 96–103
工藤俊郎・長尾佳代子・堤裕之・片山壮平・吉沢一也（2011）「必修授業との連携によって学生をリメディアル教育に導入する仕組みの構築について（大阪体育大学における基礎教育科目単位取得の仕組み）」『日本リメディアル教育学会第7回全国大会発表予稿集』pp. 125–126
境希里子（2012）「日本人学生のための日本語教育―新都心キャンパスの総合教養科目およびコラボレーション科目の場合―」『文化学園大学紀要　人文・社会科学研究』第20集　pp. 107–119
日本経済団体連合会ホームページ　新卒採用（2012年4月入社対象）に関するアンケート調査結果
http://www.keidanren.or.jp/policy/2012/058.html（閲覧日：2012年9月12日）
藤原正彦（2003）「国語教育絶対論」『祖国とは国語』講談社　pp. 66–90

資料　自分の服装を，文章で表現する

学生A

【自分の服装を表した文章】

2012年4月27日金曜日に文化学園で行われた，ドレスコードイベントに着装して行ったものについて述べます。

まず，今年のドレスコードである青を取り入れるため，水色のブラウスを着ました。このブラウスは肩先あたりまである四角い大きめのフラットカラーで，その周りには共布のフリルがついています。インターネットで韓国の通信販売サイト，「□□（サイト名）」にて購入しました。その上に，「○○（ブランド名）」の光沢感のある黄色のワンピースを着ました。黒い小さな流れ星がちりばめられたテキスタイルで，肩紐はストラップ状になっています。胸元で切り替えられていて，切り替えの上部には，中央にたてに黒いボタンが3つついていて，その両脇にタックが3本ずつ入っています。切り替えの下部は台形のようになっていて，左右の腰のあたりに大きいパッチポケットがついていて，全体的に広がりのあるデザインになっています。切り替え線下には少しギャザーがよっていてふんわりしています。ウエストは共布の紐でしぼれる様なつくりです。その下は，黒い20デニールの薄手タイツをはいていました。靴は「△△（ブランド名）」の厚底黒ネコストラップシューズをはいていました。つま先に(ママ)目とひげが金色で，ふちの所に三角形の耳が2つついた，靴自体がネコモチーフになっているもので，お気に入りです。髪型はいつもと同じで，前髪と顔の脇の毛をコテで巻いて，残りの髪の毛はストレートに下しているスタイルでした。かばんは，黒で，購売(ママ)で売られている文化のバック(ママ)よりもひとまわり大きいサイズの無地のものを持っていました。

↓

【イラストに書き添えてあったこと】

・髪は姫かっ(マ)と(マ)なので髪色は明るい色だと思う
・四角い大きさのフラットカラーがよく分からなかったです
・フラットカラーで肩紐のストラップが描けなかった
・パッチポケットの形が分からなかったので四形(ママ)にしました
・（スカートの）丈が分からないのでみじかめにしました
・（靴の）ストラップがどこにあるか分からないのであしくびにしました

↓

【イラストを見ての感想】

ほぼ，着ていた服に合っていて感動しました。
かわいく描いてくれて嬉しいです。
自分の説明と，描いてくれた人の認識が合致したのに驚きました。スカートの丈を書いていなかったなぁと思っていたら，そこを指摘されたので，自分が実際に人の絵を描いてみることによってより伝わりやすくするには細部まで記載すべきだと学びました。

学生B

【自分の服装を表した文章】

髪型
髪を2つに別(ママ)けて
あみこみをして反対側
の耳上にもってきて
まとめた。前髪は
右側に流し，長さは
目上。色は茶～赤への
グラデーション

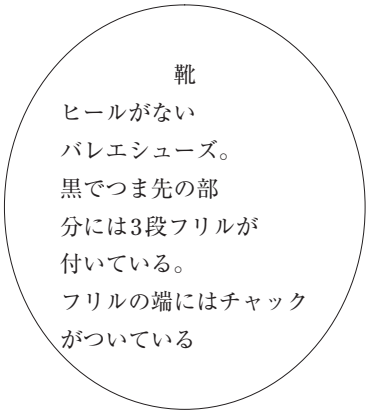
顔・耳
アイメイクはブラウンの
シャドーでつけまつげ。
ピアスは3つずつつけ
ていて，下からクロスの
ピアス，黒のストーン，
シルバーのストーンのピアス。

首
ネックレスは胸
ぐらいまである長め。
しずく形で黒のストー
ンの周りに(ママ)金属が
囲っている

アクセサリー
右腕は赤と白のビーズ
で作られたブレスレットと
黒のゴム。左腕はシル
バーの腕時計と薬指に
くまのプーさんが乗(ママ)っている指輪。

上半身
黒のロングTシャツ。
深めのVネック。
その上からグレーのカーデガン。
薄手のカーデガンでボタンも
グレー。カーデガンの前身頃
全体に黒で文字が書いて
ある。閉じて着る（ボタン3つだけ）
アウターは，黒のライダース。
開けて着る

下半身
黒のタイトスカートの
上から青のチュールが
かかっているスカート。
黒のタイトスカートは
ミニ丈で，青のチュール
はひざ下になってい
る。ウエストはゴム。
ハイウエストではく。



↓

【イラストに書き添えてあったこと】

・髪をどう2つに分けたのか，反対側とはどっちなのか。
　どうまとめていたのか
・カーディガンのあきの形不明
・ライダースの知識がなくて描けません。ごめんなさい。
・くつ下やタイツは？

↓

【イラストを見ての感想】

すごく似ていてびっくりしました。
髪型をもっと詳しく分かりやすく書けばよかったなと反省しました。
くつ下やタイツははいてないです。(ママ)って書けばよかったと思いました。